

大学図書館による展示

SALA 加盟図書館所蔵資料展示会

■跡見学園女子大学

＜跡見女学校卒の鷗外夫人登志子＞

森鷗外の最初の妻、赤松登志子は跡見女学校の卒業生です。登志子は明治4年(1871)、男爵・海軍中將の父・赤松則良と母・貞(幕府医官の林洞海・次女)の長女として東京に生まれました。明治22年(1889)に鷗外と結婚し、翌年9月に長男出産後、同年に離婚、明治33年(1900)に28歳で亡くなりました。

展示では、登志子を中心に赤松家の人々、鷗外、鷗外の母・峰子、長男・於菟といった登志子と関わりがあった人々の資料や書籍も紹介し、赤松登志子の人生を網羅的に見ることができるよう心がけました。

鷗外との結婚に至るまでの結婚申請書類(複製)や森鷗外が残した日記『自紀材料』(複製)の他、本学学祖・跡見花蹊と登志子の関わりを示す『跡見花蹊日記』も展示しました。明治18年(1885)から19年(1886)の日記には、花蹊が登志子とクリスマスの祝いの席に出かけたことや、靖国神社で桜を觀賞したことが記されています。当時、花蹊は45歳、登志子は14歳から15歳、微笑ましい師弟関係が垣間見えます。

今回展示した資料や紹介パネルを基に、平成26年夏には森鷗外記念館(津和野)で企画展が開催されました。今回「図書館と県民のつどい」で御紹介でき、大変有意義でした。



■埼玉医科大学

＜からだのなかをしてみる＞

埼玉医科大学は、今回初めて「図書館と県民のつどい」に参加しました。県民の皆さまに、医学に興味を持って欲しい、本を通して自分の身体を知って欲しいという思いからこの展示にしました。

展示資料は、医学生が人体について勉強するときに利用する教科書的な資料、身体全体について解説している読み物としての資料、身体の一部について特化して説明している資料、解剖学についての寄贈本と医学の歴史がわかる資料を選びました。

寄贈本は、医学的に貴重な資料である『人体解剖学』ホヴァルト・ビドロー著と『分娩図解』ウィリアム・スメリー著の復刻版の2冊です。

ブースには、御年配者や図書館関係者、医学・看護系の学生が多くいらっしゃいました。よく手に取られていたのは、顔のみに限定して説明されている解剖図『グラフィックスフェイス』でした。また、展示資料の目録のリーフレットを配布しました。

【主な展示資料】

- ・『みえる人体:構造・機能・病態』
- ・『トリセツ・カラダ:カラダ地図を描こう』
- ・『アートで見る医学の歴史』
- ・『人体解剖学』
- ・『分娩図解』 他12点



■芝浦工業大学

＜レールと読書の旅ーイギリス編ー＞

イギリスで鉄道の運用を開始して今年で189年目、今ではヨーロッパ大陸と結ばれ、環境・ビジネスなどの大動脈となっています。

イギリスは鉄道発祥の国であると同時に、世界でも最も保存鉄道が多い国です。美しい都市や田園、湖水地方を目当てに、イギリスの人々はもちろん、世界中の人々が訪れています。

また、イギリス鉄道は小説や映画の舞台としても数多く登場し、アガサクリスティーの小説や映画「ハリーポッター」などでよく知られています。

そんなイギリスの鉄道を、最も手ごろに楽しむことが出来るのが、今回ご紹介した図書資料です。

蒸気機関車のしくみの解説書、歴史書、写真集など、国内外の鉄道関連の貴重な資料を厳選しました。手にとっていただくことで、イギリス鉄道での旅をさまざまに思い描いていただけたのではないのでしょうか。

さらに、本学学生団体である鉄道研究会の協力を得て、学生にロンドンの地下鉄に関する掲示物を作っていただいたほか、模型車両なども展示しました。

当日は、鉄道の魅力を多くの方に感じていただけたものと思います。

今後とも、私たちは多くの学生と協力して、図書館の展示を作り上げていきたいと考えています。



■十文字学園女子大学

＜ライブラリーサポーターとの協働～学生

主体による図書館づくり“ゆる活”～＞

「ライブラリーサポーター」とは、図書館をよりよくしたいと願う約30名の学生有志です。今回はその活動状況を御紹介しました。

◆図書館キャラクター「もっくん」のグッズとして、付箋紙、ブックカバー、エプロン、缶バッジ等を制作しました。

◆7月：跡見学園女子大学図書館ボランティア主催の「七夕まつり」に参加しました。また、紀伊國屋書店さいたま新都心店で「選書ツアー」を行い、選書本とPOPを本学学生の「イチオシ本」特設コーナーで展示していただきました。

◆8月：宮城県東松島市の小学校に図書館支援ボランティアとして訪問し、現地館員や他大生と交流しました。

◆9月：FMかしまの番組「Dr.ルイスの本のひととき」に出演し、活動等を紹介しました。

◆10月：学園祭「桐華祭」に参加。

◆11月：第16回図書館総合展ポスターセッションに出展し、活動をパネルで紹介し、最優秀賞を受賞しました。(写真参照)

◆12月：図書館クリスマスコンサートを開催しました。



大学図書館による展示

■城西大学

＜日本人の知恵 “漢方”＞

本学図書館では、薬学部において現代の医療、薬学、栄養学を学習する上で日本古来の漢方や医学書を学ぶ重要性和、建学の精神に結びつく学士力・人間力の涵養に資することを目的として、医療に関する貴重な古書資料を蒐集しています。今回はこの古書資料コレクションの中から漢方薬に関する古書と調剤道具、生薬標本などを展示しました。“漢方医学”は、古代中国で生まれた医学が日本に入り、日本の風土・気候、日本人の体質に合わせて、わが国独自の伝統医学となったものです。展示では漢方薬の原料や効能について書かれた江戸時代の資料と共に、実際に江戸時代に使用された薬匙（やくさじ）や薬研（やげん）をご覧いただくことで、より関心を深めていただきました。さらに、展示標本の生薬について、生息している様子や効能を知りたいという方も多く、図鑑や資料を用いて説明し、現代医療でも使われている身近な“漢方”について知っていただく、貴重な機会となりました。なお、今回の展示資料の一部は、本学図書館ホームページ「漢方古書資料デジタルアーカイブ」において電子ブックを御覧いただけます。

【主な展示品】

- ・『本草綱目圖』3巻(万暦頃)
- ・『藥品手引艸』2巻(安永7年)
- ・『講筵筆記薬用動物篇』2巻(明治11年)
- ・『解熱散』引札
- ・薬研、天秤はかり、薬匙、薬缶、薬籠
- ・甘草、桂皮、柴胡ほか、生薬9種類



■女子栄養大学

＜無形文化遺産「和食」＞

2013(平成25)年12月、「和食；日本人の伝統的な食文化」は無形文化遺産に登録されました。1周年にあたり、テーマとしました。

「和食」には、登録申請の際に4つのアピールポイントがありました。これらに関連する所蔵資料を57点展示しました。

年中行事と食事の関連を“暦と行事食”として巻物状に掲示しました。そこに添えた小物の装飾等も、評価は上々でした。また、“食”関係のユネスコ無形文化遺産を“世界の食文化マップ”として世界地図上で紹介しました。

さらに、私たちが日常使っている“箸”の食事作法の紹介や正しく使えているかをチェックする“箸づかい体験コーナー”を設けました。小学生から年輩の方まで楽しそうに、かつ緊張感を持って参加していただき、思った以上の反響を得ました。参加者には、独自の判定基準による認定証を授与いたしました。

一汁三菜の食事は、理想的な栄養バランスと言われており、日常の食事も「和食」であり、私たちは伝統の一端を担っていることとなります。それらを、来場者の方々に伝えることができましたら幸いです。



■聖学院大学

＜和訳聖書のことば＞

聖書は様々な言葉に翻訳され、人々にキリスト教と思いを伝えてきました。

和訳の歴史は、鎖国時代に辞書もなく、言葉のつたない漂流民の助けのみで行われたことから始まったとされています。その後、様々な個人訳がなされ、さらに翻訳委員会訳、共同訳、新共同訳などの時代にあわせた翻訳が行われ、現在も行われています。それらの作業を支えたのは宣教師や翻訳者たちの熱心な宣教への思いと信仰です。

今回の展示では、このような和訳聖書の歴史を紐解き、翻訳委員会聖書（実物）や漢文による聖書の一節の掛け軸などを展示しました。また、キリスト教を語源とする私たちになじみの深い言葉や慣用句を紹介し、iPadを使って聖書に関するクイズなどを楽しんでいただきました。

＜ビブリオバトルの取り組み＞

ビブリオバトルは、京都大学から広まった本の紹介によるコミュニケーションゲームで、知的書評合戦とも呼ばれるものです。本学では、ビブリオバトルを取り入れた授業が行われているほか、図書館でも定期的開催しています。また、今年度より全国大学ビブリオバトルの予選会も実施しました。

バトラーが紹介した本と併せて発表の書き起こし原稿を展示したほか、発表の映像を放映し、この取り組みについて紹介をしました。



■東洋大学

＜哲学館から東洋大学 ～大学ゆかりの著名人～＞

明治期の私立大学は、医・法・経済・工・農・自然科学・語学などの実学あるいは特定の信仰に基づく建学の精神に特色がありましたが、東洋大学は、そのいずれでもない哲学により真理を追究する建学の精神を有しており、当時は哲学館という名称でした。

今回の展示は、哲学館から現在の東洋大学までの、大学や創立者井上円了(1858-1919、哲学者・教育者)に関わりのあった人物を3つの章を中心にご紹介いたしました。

以下、展示における人物と概略を紹介します。**第1章「哲学館の三恩人」** 勝海舟(1823-1899、政治家。井上円了に経営者としての自覚を促す)。加藤弘之(1836-1916、政治家・教育者。井上円了の成長と哲学館創立を支える。東京大学初代総理)。寺田福寿(1853-1894、僧侶。円了の同志として仏教の近代化に尽力。円了に物心両面の支援)。**第2章「ゆかりの人々」** 嘉納治五郎(1860-1938、柔道家・教育者。哲学館開設時の倫理学講師。哲学館講義録も円了と共同執筆)。中島徳蔵(1864-1940、教育者。困難だった大学令による昇格を果たす。哲学館事件で有名)。河口慧海(1866-1945、仏教学者・探検家。哲学館講義録により学ぶ。哲学館卒業生。在家仏教提唱者)。**第3章「図書館の恩人」** 島津久基(1891-1949、国文学者。古代・中世の伝説・説話・物語文学を研究)。吉田幸一(1909-2003、国文学者。古典籍蒐集家)。**他** 林古溪(1875-1947、歌人)。葛西善蔵(1887-1928、小説家)。木山捷平(1904-1966、詩人・小説家)。坂口安吾(1906-1955、小説家)。



大学図書館による展示

■日本工業大学

＜エコ・ミュージアムへの招待＞

本学では、2001年6月に環境マネジメントの規格「ISO14001」を取得して以来、環境に関する教育や研究を実践してきました。今回の展示では、それらの取組みから「エコ・ミュージアム（環境博物館）」についてパネルを用いてご紹介しました。これは、環境施設や研究成果などが目に見えるキャンパスを創造し、そこから体感による環境への理解・意識の向上を推進しようというものです。

大学では2番目の規模となる太陽光発電システムをはじめ、微生物の力で生ごみを水と空気に分解する「バイオ生ごみ処理機」などの解説とともに、LCセンター所蔵の環境関連図書「ISO 図書」から環境工学をはじめ、専門書や解説書を通して、「エコ・ミュージアム」をご理解いただけたかと思います。

展示をご覧になった来場者からは「太陽光発電を自宅で導入しているので参考になった」「ぜひ施設を見学したい」などの声がありました。

また、来場者参加企画「エコクイズに挑戦」では、展示内容についてヒントをちりばめつつ解説後、参加者が解答という流れでしたが、「あえてノーヒントで！」という方もおられ盛り上がりしました。

今回の展示を通して、環境への理解や関心を深める機会となれば幸いです。本学は今後も環境への取組みを推進していきます。



■文教大学

＜教科書コレクション Part 2 ー世界の教科書ー＞

本学の教育研究所では、1994年から世界の教科書の収集を開始し、今では23カ国の教科書を所蔵しています。今回は、その中から特にインドの教科書の展示と、同研究所で研究対象としている最新のデジタル教科書の紹介を行いました。

◆インドの教科書の展示

188冊の教科書を並べるとともに、その内容の一部を日本語訳した大型パネル、インドの教育制度を解説した大型パネルを用意しました。IT産業が急速に成長するインドにおいて、特に算数の教育が注目を集めています。今回の展示でも算数や理科に興味を持つ方が多く、小学校低学年を対象とする教科書を開き、「この年齢でこんなに難しい計算をしているんだ」と感心しながら御覧になる方が多くいらっしゃいました。

◆デジタル教科書の紹介

10台のiPadを並べ、研究所所長の今田晃一教授とそのゼミナール生4人がデジタル教科書の解説をし、来場者の方々に実際に操作してもらいました。

理科のデジタル教科書では実験の映像を見ることができ、語学の教科書では正しい発音で読み上げてくれる機能があります。これから先の世代の子ども達がどのような教科書で勉強していくのか皆さん興味津々で、熱心に解説を聞いていました。



■ものづくり大学

< “いい～もの” 鋳物づくりの魅力 >

今年は鋳物をテーマに、開学当初から所有している鋳造関係の書籍や今年度購入したDVD（本学製造学科鈴木克美教授監修）のほか、教授および学生が製作した鋳物作品などを紹介、展示しました。

鋳造とは、溶かした金属を砂や金属などでつくられた型に流し込んで固める金属加工の製法です。人類が数千年前から試行錯誤して発展させてきた“伝統技術”であり、自動車等の部品や携帯電話等に使われる“ハイテク技術”でもあります。

本学の製造学科は鋳造の授業があり、面白さを体験しながら技術を理解します。卒業制作として仏像鋳物モニュメントを製作した学生もいます。行田市街地の国道125号線沿いに、蓮の花に乗っている三体の仏像が設置されています。とてもかわいらしいので、行田市にお越しになった際にはぜひご覧ください。

他にも、小麦粉でつくった鋳型にお湯で溶ける低融点合金を流し込む親子鋳造教室や、精密鋳造によるアクセサリ体験教室の様子も紹介しました。来場者の中には、この体験教室に興味を持った方もおられました。

また、今年で4年目を迎えたゴーヤによる緑のカーテンの取り組みも紹介しました。夏の暑い中、学生・教職員一丸でつくりあげた図書情報センターの南～西面の緑のカーテンは、行田市の緑のカーテンコンテストで3年連続最優秀賞を受賞する事ができました。



■立正大学

< ブリンクリー文庫～知られざる明治のジャパノロジスト～ >

フランシス・ブリンクリー（1841-1912）はアイルランド生まれのイギリス人で、慶応3年（1867）、26歳のときに来日し、以後帰国することなく日本で暮らしました。砲術や数学の教師、『語学独案内』や三省堂『和英大辞典』の編著、英字紙「ジャパン・メール」の発行など、様々な才能で日本の近代化に大きく貢献しました。また、写真入り豪華本『ジャパン』をはじめ、日本の歴史や文化、美術を海外へ紹介する著書も多いのですが、翻訳されていないこともあり、あまり知られていません。“知られざる明治のジャパノロジスト”です。

フランシス・ブリンクリーの家族は、妻の安子と2男2女で、後に本学文学部英文学科教授となる次男のジャック・ブリンクリー（1887-1964）が遺した蔵書が「ブリンクリー文庫」です。今回はその中から、父であるフランシス・ブリンクリーの著書を中心に展示しました。

展示では、壁面に貼った関連図が好評で、親交のあった伊藤博文、勝海舟、河鍋暁斎、ジョサイア・コンドルなど、明治時代の著名人とかからめて、フランシス・ブリンクリーの業績や人となりを紹介しました。

